

1920年代のベルリン高等音楽学校への 鈴木ヴァイオリンの寄贈

Donation of Suzuki Violins to the Berlin State School of Music in the 1920s

井上 さつき・畑野 小百合^{*}
INOUE Satsuki, HATANO Sayuri

In December 1926, Masakichi Suzuki (1859-1944), founder of the Suzuki Violin Factory, sent his eldest son, Umeo, to Germany to demonstrate his newly made high-class violins. With his brother Shin'ichi, who had just returned to Berlin from Japan, Umeo visited there many famous violinists such as Karl Klingler, Willy Hess, Josef Wolfstahl and Albert Einstein, the great scientist and amateur violinist, to have them play their father's instruments.

The following September, Shin'ichi went alone to Vienna with Masakichi's violins to visit two celebrated violinists of the Vienna Philharmonic Orchestra: Arnold Rosé and Franz Mayeracker. They both appreciated the quality of the instruments and wrote letters of recommendation.

When Umeo and Shin'ichi visited the Berlin State School of Music, they donated two violins to the school. After receiving a letter of gratitude from the vice president of the school, Professor Dr. Georg Schünemann, Masakichi decided to offer one of suitable violins to the school each year, and proposed this idea to Dr. Schünemann. In "Akten betreffend: Stiftung der Fa Suzuki", now located in the archive of the Berlin University of the Arts, there are nine letters concerning the donation of violins written by Masakichi and Schünemann.

In this article, we show the original versions of these letters along with Japanese translation and give some comments. The donation took place only once in 1928 and two violins sent by Japan lent to the students of the Berlin State School of Music.

キーワード：鈴木政吉 Suzuki, Masakichi、鈴木ヴァイオリン Suzuki Violin Factory、
ヴァイオリン Violin、ベルリン高等音楽学校 The Berlin State School of
Music、1920年代 the 1920s

^{*}共同研究者、ベルリン芸術大学博士課程在籍

0. はじめに

尾張藩の下級武士の子として生まれた鈴木政吉(1859-1944)は1887(明治20)年に初めてヴァイオリンを目にし、見よう見まねでヴァイオリンを作り、その後、家業となっていた三味線店を廃業し、ヴァイオリン製造を本職とするに至った。明治後期にヴァイオリンの生産において国内で地歩を固めた政吉は、大正期に入ると世界に飛躍する。鈴木ヴァイオリンは第1次世界大戦の影響で諸外国へのヴァイオリンの輸出が急増し、1921年前後に絶頂期を迎えた。その後、大戦後の不景気と輸出の減少により人員削減を迫られるが、その中で、鈴木政吉はヴァイオリンの何たるかを学び、追求する音色の方向性をクレモナのオールドヴァイオリンに定めた。政吉はベルリンに留学していたヴァイオリニストの三男、鈴木鎮一(1898-1998)が同地で購入し、一時帰国の際に持ち帰ったガールネリの銘器を手本に独自の製法を考案し、自作の高級手作り楽器を手がけるようになり、工場で生産していた量産品とは別に、販売し始めた。

政吉は1926年、それら的高級手工モデルをドイツやオーストリアの名演奏家たちに認めてもらおうと息子たちを「宣伝行脚」に派遣する。この企画がきっかけとなって、ベルリン高等音楽学校へ鈴木ヴァイオリンを寄贈する案が持ち上がり、実際に1928年に鈴木政吉から2本のヴァイオリンが同校へ送られた。この寄贈については、現在、ベルリン芸術大学の資料室に所蔵されている「鈴木社の寄贈に関する記録」("Akten betreffend: Stiftung der Fa Suzuki", Sig.: HdK-Archiv, Best. 1, Nr. 447)によって、その詳細がわかる。

本論文では、「鈴木社の寄贈に関する記録」に収められている9通の手紙を全訳し、そこから浮かび上がってくる当時の状況を明らかにする。なお、本論文執筆に当たっては、ベルリンでの資料の調査とドイツ語からの翻訳の部分を畑野小百合(ベルリン芸術大学博士課程)が担当し、そのほかの部分の井上さつきが担当している。また、本稿では漢字は新字に改めた。

1. ドイツ・オーストリアでの「宣伝行脚」

鈴木ヴァイオリン工場を創始した鈴木政吉は1926年から27年にかけて、長男梅雄と三男鎮一に自作の高級ヴァイオリンを持たせ、ドイツとオーストリアの演奏家たちに試奏してもらった。梅雄は日本に一時帰国していた弟の鎮一がベルリンに戻るのと相前後して1926年の10月1日に日本を出発し、シベリア経由で16日にベルリンに入り、ここに1カ月半滞在した後、パリ、マルセイユを経て帰国の途についた。その間、日本では、12月25日に大正天皇が崩御、元号が昭和と改まった。梅雄は1927(昭和2)年1月16日に日本郵船の白山丸で神戸に戻り、17日午後、名古屋に戻った。

ベルリンで、梅雄は鎮一とともに、父政吉の楽器を携えて、カール・クリングラー、ヴィリー・ヘス、ヨーゼフ・ヴォルフスタール、ユリウス・クレンゲルらの名演奏家たち、そしてアマチュア音楽家としても知られる物理学者のアルバート・アインシュタインのもとを訪れ、高い評価を得た。

カール・クリングラー Karl Klingler (1879-1971) はヨアヒム門下で鎮一の師であり、ベルリン高等音楽学校のヴァイオリン科教授でクリングラー弦楽四重奏団を主宰していた。ヴィリー・ヘス

Willy Hess (1859-1939) はヨアヒム門下の高名なヴァイオリニスト。作曲家のマックス・ブルッフと親しく、ブルッフの後押しで、ベルリン高等音楽学校のヴァイオリン科首席教授に就任した人物である。ヨーゼフ・ヴォルフスタール Josef Wolfstahl (1899-1931) はカール・フレッシュの高弟だったヴァイオリニストで、ベルリン国立歌劇場管弦楽団のコンサートマスターであった。ベルリン高等音楽学校では貴志康一を教えている。ヴォルフスタールについては鎮一が「其音質の優れた点につき感謝と賞賛の手紙が来ている」と書いているが（鈴木鎮一 1935）、その手紙は現存していない。ユリウス・クレンゲル Julius Klengel (1859-1933) はライプツィヒで政吉の四男、^{ふみお}二三雄が師事していた名チェリストで、高勇吉や齋藤秀雄が学んだ師であった。アインシュタインから政吉に送られた礼状は現存している。

一方ウィーンに関しては、梅雄が帰国した後、鎮一が一人で、政吉の楽器をもってウィーンのヴァイオリニストのもとを訪れた。このことは 1927 年 9 月にウィーンで書かれた 2 通の推薦書（会社資料）からわかる。1 通目はフランツ・マイアーレッカー Franz Mayerecker (1879-1950)、2 通目はアルノルト・ロゼ Arnold Rosé (1863-1946) によるものである。共にウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターで、名ヴァイオリニストとして知られていた。これらは二人の名演奏家による自筆の推薦書で両方とも政吉の楽器について非常に好意的である。

こうして、1926 年から 27 年にかけて、鈴木政吉が息子たちにもたせた楽器は、ドイツとオーストリアの演奏家の手に渡った。

2. ベルリン高等音楽学校への寄贈

さて、政吉の女婿北村五十彦は、政吉が亡くなった 2 年あまり後、1946（昭和 21）年 8 月に『聖匠鈴木政吉の足跡』という小冊子を著し、その中で、梅雄が持っていった楽器がドイツ・オーストリアで絶賛されたことを述べ、続けて、「爾來伯林高等音楽学校の注文に応じて数回に亘りて鈴木父子の自作品を納入せり」と書いている（北村 1946）。

今回、ベルリン芸術大学の資料室に保管されている資料を調査したところ、鈴木ヴァイオリンから楽器は確かにベルリン高等音楽学校に「納入」されたが、それらの楽器は学生たちへ「寄贈」されたということがわかった。ここでは、現在、ベルリン芸術大学の資料室に所蔵されている、「鈴木社の寄贈に関する記録」（Akten betreffend: Stiftung der Fa Suzuki, Sig.: HdK-Archiv, Best. 1, Nr. 447）に収められている 9 通の手紙の原文と翻訳を掲載し、その間のヴァイオリンの寄贈をめぐる事情を考察していく。

9 通の手紙は、鈴木ヴァイオリン工場の工場主、鈴木政吉と、当時ベルリン高等音楽学校の副校長を務めていたゲオルク・シューネマンとの間でやりとりしたものが 8 通。うち、鈴木政吉からシューネマンに宛てて送られた英語の手紙が 5 通。シューネマンから鈴木に宛てたドイツ語の手紙が 3 通。そのうち 2 通はタイプ打ちの手紙の複写であり、1 通は、1928 年 9 月 18 日付の鈴木からの問い合わせの手紙の裏に手書きで書かれたもので、その手紙に対する返事の下書きであると考えられる。残りの 1 通は、鈴木ヴァイオリンから送られてきた楽器が免税品であることを申告

したシューネマンのドイツ語の手紙の複写である。

ゲオルク・シューネマン Georg Schünemann (1884-1945) はドイツの音楽学者、教育家で、1907年に指揮法の歴史についての論文で博士号を取得した。1919年以降、ベルリン大学（フリードリヒ＝ウィルヘルム大学）で教鞭をとり、1920年にベルリン高等音楽学校の副校長に就任。政吉から楽器が送られたのは、その副校長時代である。1932年に同校校長に昇任するが、翌年ナチス政権からマルクス主義者の傾向があるという嫌疑がかけられ解雇される。しかし、1934年にはプロイセン国立図書館音楽部門長に就任した。シューネマンは近代ドイツの音楽教育の基礎を築いた一人で、その一方、ベートーヴェン研究やプロイセン音楽史についても著作を残した。

資料「鈴木社の寄贈に関する記録」に収められている鈴木政吉とシューネマンの9通の手紙は、次の表からわかるように日付順に並べられているわけではないが、ここでは日付を手がかりにして、順を追って見ていくことにしよう。

資料番号	順序	日付	執筆者	言語
Nr. 447, Bl. 1	2	Apr. 28, 1927	Schünemann	独語
Nr. 447, Bl. 2	1	Feb. 23, 1927	Suzuki	英語
Nr. 447, Bl. 3	9	Nov. 5, 1928	Suzuki	英語
Nr. 447, Bl. 4r	8	Oct. 15, 1928	Schünemann	独語
Nr. 447, Bl. 4v	7	Sep. 18, 1928	Suzuki	英語
Nr. 447, Bl. 5	5	Mar. 7, 1928	Schünemann	独語
Nr. 447, Bl. 6	6	Jun. 5, 1928	Suzuki	英語
Nr. 447, Bl. 7	4	Mar. 1, 1928	Schünemann	独語
Nr. 447, Bl. 8	3	Jan. 18, 1928	Suzuki	英語

(1) 1通目 Nr. 447, Bl. 2. (1927年2月23日)

鈴木政吉からベルリン高等音楽学校副校長シューネマン宛て（英語）

〔日本語訳〕

拝啓

息子たちがお持ちしたヴァイオリン（複数）についての1月15日付のあなたの手紙に感謝し、また、あなたがそれらを非常に好まれることを喜んでいきます。

あなたのお手紙の最後のパラグラフに関して、その件に対するご親切な配慮に感謝します。しかし、私は全面的にあなたのご判断にお任せしたいと思います。

私は将来、毎年、私の良いヴァイオリンのうちの1本を、貴学を卒業するすぐれた生徒に贈りたいと強く願っています、あなたの手を通して、そして、それをあなたが望まれるならば。

その場合、私は毎年、いつあなたがその楽器を必要なのかを知らせてくださるようお願いしなければなりません。間に合うようにお送りするためです。

敬具

[英語原文]

February, 23rd 1927.

Dear Sir,

I thank you for your kind letter dated the 15th January regarding the violins taken by my sons, and am glad that you like them so much.

As to the last paragraph of your favour I thank you for your kind consideration on the matter, but I would like to leave[sic] entirely to your judgement.

I am quite willing to present one of my good violins every year in future, to good student who graduate your school, through your hand, if you like me to do so.

If so I must ask you to let me know as to when do you require the instrument every year, to enable me to send it well in time.

Yours sincerely,

M. Suzuki

[解説]

鈴木政吉からシューネマンに送られたこの手紙から、1926年暮れにベルリンに「宣伝行脚」に赴いた鈴木梅雄と鎮一がベルリン高等音楽学校に試奏のために持っていった複数の楽器を、同校に寄贈してきたことがわかる。1927年1月15日付のシューネマンからの礼状（現存せず）を読んだ政吉は、ベルリン高等音楽学校側が寄贈の申し出を受け入れてくれたことを喜び、今後、毎年1本ずつ、「良い」ヴァイオリンを寄贈するという意思を表明している。

(2) 2通目 Nr. 447, Bl. 1 (1927年4月28日)

シューネマンから鈴木政吉へ (ドイツ語)

[日本語訳]

拝啓

今月23日のあなたのお手紙に対し、毎年1本のヴァイオリンを寄贈していただけるとのご提案は、私たちにとって大変ありがたいものであることをお伝えいたします。ヴァイオリンは、そのような楽器を購入することのできない才能ある勤勉な学生に与えることといたします。ご都合のよい期日に、大学宛てに直接お送りいただけましたら幸いです。〔楽器の〕貸与については、必ず正式にお知らせいたします。

敬具

[ドイツ語原文]

Charlottenburg, 28.4.1927

Sehr geehrter Herr !

Auf Ihr Schreiben vom 23. ds. Mts. teile ich Ihnen mit, dass wir mit grossem Dank Ihr Angebot, jedes Jahr eine Geige zu stiften annehmen. Wir werden diese Geige einem begabten und fleissigen Studierenden geben, der nicht in der Lage ist, sich ein solches Instrument käuflich zu erwerben. Es wäre uns willkommen, wenn das Instrument direkt an die Hochschule für Musik zu einem von Ihnen zu bestimmenden Termin geschickt würde. Wir werden nicht verfehlen, Ihnen von der Verleihung amtlich Kenntnis zu geben.

Mit dem besten Dank

Ihr ergebener

[サイン]

[解説]

政吉の寄贈の提案に対するシューネマンからの謝意。「今月 23 日付のあなたの手紙」とあるが、実際には、2 か月前の 2 月 23 日付の手紙に対する返事である。楽器を貸与する際は、必ず正式に伝えることを確約している。

(3) 3 通目 Nr. 447, Bl. 8. (1928 年 1 月 18 日)

鈴木政吉からシューネマンへ (英語)

[日本語訳]

拝啓

あなたとのお約束に従って、本日、小包郵便で、私が最近完成させた 2 本のヴァイオリンをあなたに送りました。それらが無事にそちらに届くように願っています。

もっと早くそれらをお送りするべきでしたが、私を満足させるよい楽器を得ることができなかったのでこのような甚だしい遅れが生じたのです。そのことを私はおわびしなければなりません。

これら [の楽器] は、完璧なものではありませんが、かなり良いです。そして、もし、あなたが学生たちにそれらを賞として与えてくだされば幸いに存じます。

私はあなたの学校に送られる楽器は免税であると聞きました。それが、私がおあなたに直接それらをお送りした理由です。

敬具

[英語原文]

18th January, 1928.

Dear Sir,

I have forwarded you, today per parcels post, two violins I have recently completed, according to my promise with you, and hope that they will reach you safely.

I ought to send them to you much earlier, but as I could not obtain good instruemnts [sic] satisfy-

ing me such serious delay has been resulted, for which I must apologise you.

These are pretty good, although they are not perfect ones, and I shall be glad if you take trouble to give them to the students as prize.

I hear that any instruments sent to your school are free from import duty, that is why [sic] I have sent them direct to you.

Yours Sincerely,

M. Suzuki

〔解説〕

1927年4月28日付でベルリンから送られたシューネマンの手紙は政吉のところについていたかわからないが、政吉は年を越して、1928年1月18日、ようやく寄贈用のヴァイオリン2本を小包郵便で送り、その旨を手紙に書いた。

(4) 4通目 Nr. 447, Bl. 7. (1928年3月1日)

シューネマンから鈴木政吉へ（ドイツ語）

〔日本語訳〕

本年1月18日の貴信に対し、お約束頂いたヴァイオリンはまだこちらには未到着であることをお知らせいたします。到着次第、すぐにご連絡させていただきます。以前ご寄贈いただいた2本の楽器は、現在2人の学生によって演奏されています。彼らは、適当な楽器を買うことのできない、特別に支援を要する学生です。ご寄贈によりこれらの学生を大いにお助けいただいたことに、一同御礼申し上げます。

今後も懇意にさせていただけるという偉大なご親切に感謝しつつ、ご挨拶申し上げます。

〔ドイツ語原文〕

1. März 1928.

Sehr geehrter Herr Suzuki!

Auf Ihre Zuschrift am [sic] vom 18. Januar ds. Js. teile ich Ihnen ergebenst mit, dass die von Ihnen in Aussicht gestellten Geigen bisher bei uns nicht eingetroffen sind. Sobald sie ankommen, werden wir Ihnen Nachricht geben. Die beiden Instrumente, die Sie uns s. Zt. zur Verfügung gestellt haben, werden augenblicklich von zwei besonders bedürftigen Schülern, die sich ein ordentliches Instrument nicht kaufen können, gespielt. Durch diese Spende haben Sie diesen beiden Studierenden einen grossen Dienst erwiesen, für den wir Ihnen besonders dankbar sind.

Indem wir Ihnen für Ihre grosse Liebenswürdigkeit, mit uns auch weiterhin in Verbindung zu bleiben, unseren wärmsten Dank aussprechen, begrüsse ich Sie

als Ihr ergebener

〔サイン〕

〔解説〕

1927年1月18日付で政吉から送った手紙は2月中にベルリンに届いたものの、2本のヴァイオリンは同時には届かなかった。シューネマンは楽器が到着していないことを知らせ、同時に、政吉が最初に寄贈した2本のヴァイオリンがすでに学生に貸与され、活用されていることを報告している。

(5) 5通目 Nr. 447, Bl. 5 (1928年3月7日)

〔日本語訳〕

郵便小包 No. 4773 および No. 4774 の中身は、日本、名古屋の鈴木氏が、援助を必要とする国立音楽高等学校の学生への褒賞として送ったヴァイオリンである。

この申告をここに正式に証明する。

副校長

シューネマン教授

〔ドイツ語原文〕

7. März 1928.

In den beiden Postpaketen Nr. 4773 und 4774 sind Violinen enthalten, die Herr Suzuki Nagoya, Japan, als Preise für bedürftige Studierende der Staatlichen Hochschule für Musik übersendet.

Diese Angaben werden hiermit amtlich bescheinigt.

Der stellvertretende Direktor

Prof. Dr. Schünemann

〔解説〕

シューネマンが政吉に宛てて不着の手紙を書いて1週間足らずのうちに、税関からヴァイオリンが届いた旨の知らせがあったと思われる。シューネマンは輸入税を課されないようにするために、それが学生への褒賞として送られたものであるという証明書を提出した。

(6) 6通目 Nr. 447, Bl. 6 (1928年6月5日)

鈴木政吉からシューネマンへ (英語)

〔日本語訳〕

拝啓

3月1日のあなたのお手紙をいただいて以降、私がお送りした2本のヴァイオリンに関して、ご連絡をいただいていません。

しかし、私はこの手紙があなたのお手元に届く前にそれらが到着したと信じています。そして、それらが損傷を受けていないことを希望しています。

輸入税に関しては、私は貴校のための楽器にはそれがかからないと理解しています。
ご連絡をいただきたいです。

敬具

〔英語原文〕

June, 5th 1928.

Dear Sir,

Since I have received your favour of the 1st March last I have not heard from you yet, as to the arrival of the two violins I sent you.

I beleive(sic), however, that they have reached here before this letter is in your possession, and hope that they are without any damage.

As to the Impot Duty I understand that they do not charge it on the instruments for your school.

I would like to hear from you.

Yours faithfully,

M. Suzuki

〔解説〕

1928年3月1日付でヴァイオリンがまだ届いていないという手紙をシューネマンから送られて以降、知らせがないことを心配した政吉は、6月5日になって問い合わせの手紙を書いた。実際には3月7日にはベルリンに楽器は届いていたのだが、それは政吉側に知らされていなかった。

(7) 7通目 Nr. 447, Bl. 4v (1928年9月18日)

鈴木政吉からシューネマンへ (英語)

〔日本語訳〕

拝啓

「2本のヴァイオリン」

6月5日に手紙を書いてから、私はあなたにお送りした2本のヴァイオリンについて何もあなたからお聞きしていません。そして、私は、それらが途中で置き忘れられたかもしれない、そして、あなたの手元に到着していないのではないかと危惧しています。

どうか、あなたがそれらを受け取られたかどうかお知らせください。

敬具

〔英語原文〕

18th September, 1928.

Dear Sir,

“Two Violins”

Since I have written you on the 5th June last I have not heard anything from you yet on the two violins I sent you, and I rather fear that they might have been mislaid on the way, and that never arrived to in your possession.

Please let me know whether you have received them or not.

Yours faithfully,

M. Suzuki

〔解説〕

1928年6月5日付で問い合わせの手紙を書いたから3カ月たち、9月に入っても、まだシューネマンから連絡がないので、政吉は楽器が途中で紛失したのではないかと心配し始め、再度、問い合わせの手紙を送った。

(8) 8通目 Nr. 447, Bl. 4r (1928年10月15日)

シューネマンから鈴木政吉宛て (ドイツ語)

〔日本語訳〕

拝啓

本年9月18日付けのあなたの手紙から、ヴァイオリンの受け取り後すぐにお送りした礼状が、残念ながらあなたの元に届いていないものと推察いたします。2本のヴァイオリンは、破損することなくこちらに到着し、すぐに授業で使われ始めました。

片方のヴァイオリンは、間もなく褒賞としてあるオーケストラ奏者に貸与されます。もう一方は、次の学期に別の若いヴァイオリン奏者に貸与されます。

2本の素晴らしい楽器に対して、心から御礼申し上げます。あなたはこの寄贈を通して、良い楽器を買うことのできない私たちの学生を、本質的にお助けくださっています。

敬具
副校長

〔右下の追記〕

1本のヴァイオリンは、1928年10月25日にオーケストラの学生、ヴェルナー・ゾルゲに貸与されました。

〔ドイツ語原文〕

Chlg 15/10 28

Einsender

Sehr geehrter Herr Suzuki!

Aus Ihrem gefl. Schreiben vom 18. Sep. d. Js. ersehe ich zu meinem Bedauern, daß mein Dankesbrief, den ich bald nach Empfang der beiden Violinen an Sie gerichtet habe, leider nicht in Ihre Hände

gelangt ist. Die beiden Geigen sind unbeschädigt hier eingetroffen und haben sofort im Unterricht Verwendung gefunden.

Die eine wird demnächst einem Orchesterspieler als Prämie verliehen werden, die zweite im nächsten Semester einem anderen jungen Geiger.

Für die beiden schöne Instrumente spreche ich Ihnen meinen verbindlichen Dank aus. Sie leisten damit unseren Studierenden, die sich kein gutes Instrument kaufen können, eine wesentliche Hilfe.

Mit vorzügl. Hochachtung
als stellv. Direktor

〔右下の追記〕

Eine Geige ist dem Orchesterschüler Werner Sorge am 25/10 28 als Prämie verliehen worden.

〔解説〕

この手紙は手書きの草稿で、政吉からシューネマンに送られた9月18日付の手紙の裏面に書かれている。9月18日付の手紙は今回、1カ月かからず、ベルリンに到着したようである。この手紙には、「ヴァイオリンの受け取り後すぐにお送りした礼状」が日本に届いていないようだと書かれているが、「鈴木社の寄贈に関する記録」には、ベルリンから送ったはずの礼状の写しは保管されていない。ベルリン高等音楽学校側で、受け取ったという礼状を出すのを忘れていたという可能性もありうる。ここではどのように楽器が使われているか、報告もしている。

(9) 9通目 Nr. 447, Bl. 3 (1928年11月5日)

鈴木政吉からシューネマンへ (英語)

〔日本語訳〕

拝啓

10月15日付のあなたの手紙を確かに受け取りました。そして、私がお送りした2本のヴァイオリンがそこに無事に届いたことを知ってうれしいです。

それらが学生たちのための賞として役立ったと聞いたことにも喜んでいきます。

敬具

〔英語原文〕

November, 5th 1928.

Dear Profeseor [sic] Dr,

I have duly received your favour of the 15th October, and am glad to learn that the two violins I sent you have arrived there safely.

It is my pleasure to hear also that they serve as prise for students.

With the best regarts,

Yours sincerely

〔解説〕

1928年10月15日付でベルリンのシューネマンから送られた手紙は異例の速さで名古屋に届き、11月5日付で返信が送られている。普通郵便ではなく、速達などの方法を取ったのかもしれない。ベルリン高等音楽学校側のあわてた様子が感じられる。政吉の手紙には、自分が送った楽器が学生に対する賞として使われていることを知ってうれしいとあるが、それ以上のことは書かれていない。

3. おわりに

当初、政吉は1年に1本、自分の作ったヴァイオリンをベルリン高等音楽学校に寄贈したいという意思を表明していたが、今回調査した資料からは、日本から楽器が送られたのは1回だけで、そのときに2本寄贈されたことがわかった。さらに、最初に梅雄と鎮一が試奏してもらうために持参した楽器2本は、持参時に寄贈していたことも明らかになった。結局、ベルリン高等音楽学校には、合計4本の鈴木政吉作のヴァイオリンが寄贈され、学生たちに貸与されていたわけである。

1928年に郵便小包で送られた2本のヴァイオリンについて、政吉は「完璧なものではないが、かなり良い」と謙遜しながら書いているが、それらは実際にはどの程度の楽器だったのだろうか。残念なことに、これらの寄贈楽器はベルリンに現存していないため、調べる術がない。

鈴木政吉とゲオルク・シューネマンとの一連のやりとりを追うと、大正末年から昭和初年にかけて、ベルリンと名古屋の距離は、なおも遠かったことがわかる。自他共に音楽の本場であると認めるドイツのベルリン高等音楽学校が、洋楽の後進国である日本からヴァイオリンの寄贈を受けることに複雑な思いを抱いたことは想像に難くないが、少なくともこれらの文面から、政吉のヴァイオリンの寄贈の申し出を喜んで受け入れ、実際に、楽器を必要とする学生たちに貸与していたことは確かである。

楽器の寄贈が1度で終わった原因は不明だが、この頃日本国内でヴァイオリンの売れ行きがますます不振になり、鈴木ヴァイオリン工場の経営状態が厳しくなっていたことと無関係ではないだろう。良い楽器を外国の音楽学校に無償で寄贈するような余裕はなくなっていたと思われる。

なお、本稿は平成25年度～27年度日本学術振興会科学研究費採択課題「近代日本における楽器産業の発展メカニズムと音楽文化——鈴木ヴァイオリンを中心に」（課題番号：25370107）の研究成果の一部である。

○ベルリン高等音楽学校資料（現ベルリン芸術大学資料館所蔵）

「鈴木社の寄贈に関する記録」

"Akten betreffend: Stiftung der Fa Suzuki", Sig.: HdK-Archiv, Best. 1, Nr. 447

○参考文献

井上さつき 2014 『日本のヴァイオリン王——鈴木政吉と幻の名器』中央公論新社

北村五十彦 1946 『聖匠鈴木政吉の足跡』（私家版）大阪音楽大学音楽博物館所蔵

鈴木鎮一 1932 「日本ヴァイオリン史」『室内楽 音楽講座第11篇』文芸春秋社, 97-118.

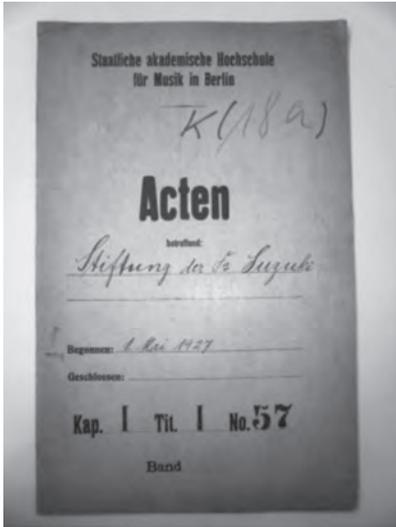


図1 「鈴木社の寄贈に関する記録」表紙

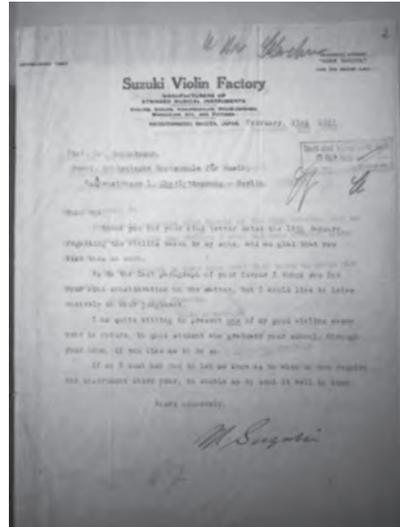


図2 1927年2月23日付 政吉から

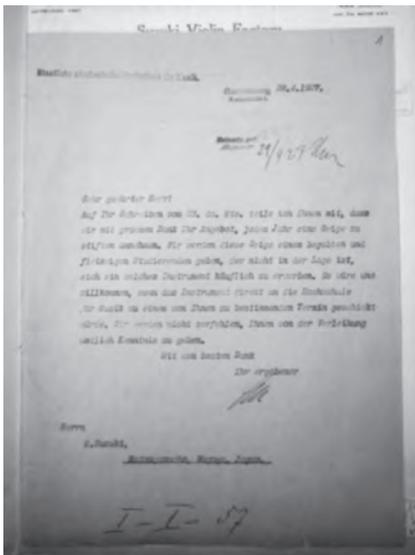


図3 1927年4月28日付シュエネマンから



図4 1928年3月7日税関(?)への申告書